

# Mahāpadānasuttanta における過去仏の成道記事

天 野 信

## はじめに

現存するブッダ・釈尊の伝記（以下「仏伝」と呼ぶ）の原型および成立過程を考察するうえで、初期仏教文献（阿含經典・律藏等）に含まれる仏伝の研究は不可欠となる<sup>(1)</sup>。これらの仏伝は、ブッダの生涯を断片的に記すものである<sup>(2)</sup>。その一方で、初期仏教文献中には、ブッダ・釈尊以前の時代に存在したとされる過去仏の伝記が存在する。そして、過去仏にまつわる事蹟は、「大本経」類に集約される<sup>(3)</sup>。本経は、仏陀観の変遷と展開を考察するうえで重視されてきた。その内容を概略すると以下のようになる（ここではパーリ本の内容に従う）。

〈1〉比丘たちの間で前生に関する談話が起る。〈2〉それに答える形で、ブッダが比丘たちに、過去七仏それぞれの生まれた時代、生まれ、姓、寿命、菩提樹、二大弟子、サンガの構成、侍者、父母、王都の名称を述べる（「七仏の事蹟」）。ここで一度、ブッダは比丘たちの前から去る。〈3〉再び現れたブッダは、第一仏であるヴィパッシン仏の伝記を、比丘たちに語り始める（「ヴィパッシン仏伝」）。〈4〉最後に、浄居天の神々が、ヴィパッシン仏の事蹟をブッダに語る。

上記の様に「七仏の事蹟」と「ヴィパッシン仏伝」が大半を占める構成となっている。「七仏の事蹟」と「ヴィパッシン仏伝」の成立順序については、『大本経』の異訳である漢訳文献の比較・検討から、「七仏の事蹟」に相当する内容を持つ文献が先に存在し、その後で「ヴィパッシン仏伝」が成立

したと考えられている。<sup>(5)</sup>「ヴィパッシン仏伝」の内容は、ヴィパッシン菩薩の誕生から始まり、ヴィパッシン王子の具える三十二相についての説明・四門出遊・出家・成道・梵天勸請・初転法輪・サンガの成立、最後にヴィパッシン仏による波羅提木叉の誦出・制定についてが記されており、過去仏の伝記とはいえ、極めて纏まった仏伝の体裁を保つ。上記の内容に涅槃記事が加われば全生涯について記す内容となるため、全生涯を記す仏伝の出現と深く関わってくる可能性を有している。<sup>(6)</sup>そのため、生涯の全伝に近い、より纏まった伝記は、仏伝よりも先に、過去仏の伝記として集約・編纂された可能性を検討する必要がある。そしてこのことは、「ヴィパッシン仏伝」が、仏伝を模倣して作成されたのか、否かという問題とも関わってくる。<sup>(7)</sup>この問題は、「ヴィパッシン仏伝」に含まれる記事によって事情は異なると考えるべきであろう。例えば、「ヴィパッシン仏伝」に保存されている事蹟は、「大本経」類が編纂された当時、存在した仏伝に含まれていた事蹟の複製である可能性がある。現存の仏伝には示されない内容が、「ヴィパッシン仏伝」に伝承されているとすれば、失われた仏伝の事蹟を再構築することも可能となる。しかし、「ヴィパッシン仏伝」には、仏伝の模倣ではなく、過去仏の伝記のために編纂された事蹟が存在する可能性も当然あるので慎重に峻別しなければならない。<sup>(8)</sup>同時に、仏伝が、「ヴィパッシン仏伝」に含まれる事蹟を模倣した可能性を検討する必要もあろう。これらの問題を解明するには、ヴィパッシン仏にまつわる事蹟ごとの調査・検討が必要となる。その際、所属部派が一致する仏伝文献との比較が基本作業となる。この作業は、初期仏教文献における仏伝の一形態を定義するうえでも重要である。

本稿では、上記の問題意識を持ったうえで、*Mahāpadānasuttanta* (以下 MAP) の成道記事に着目する。ここでは、過去仏であるヴィパッシンが、菩薩時代に十支縁起を観察することによって成道を得ることが記されている。しかし、仏伝における縁起成道記事には、通常十二支縁起が用いられることや、対応する『大本経』等の諸漢訳では、パーリ本とは異なり十二支縁起が記されることなどから、この記事は、縁起説の展開を考察するうえで以前か

ら重視されてきた。今回は、過去の研究を整理したうえで、MAP が伝承する過去仏の十支縁起成道記事が、仏伝に組み込まれた十二支縁起成道記事よりも古い形態であることを論証する。その際所属部派が異なる漢訳文献等も併せて考察する。

## 1. 縁起説観察によるブツダの成道記事

MAP におけるヴィパッシン仏成道記事の検討にはいる前に、パーリ上座部伝承の仏伝が保存する、縁起説観察によるブツダ成道記事について確認しておく。ブツダの成道前後に行われた縁起説観察を描く縁起成道記事については、村上（平野）真完氏が詳細に調査している。それによると、パーリ伝承では *Udāna*, パーリ律「小品」*Mahākhandhaka*, *Samyuttanikāya* XII. 4-10, *Samyuttanikāya* XII. 65, そして過去仏の縁起成道を記す MAP が確認されている<sup>(9)</sup>。この中で、仏伝に組み込まれた縁起成道記事を検討するとなると、パーリ律「小品」*Mahākhandhaka* (以下「パーリ律受戒毘度部」) が重要となる<sup>(10)</sup>。その内容は、ブツダ成道後の十二支縁起観察記事から始まり、梵天勸請・初転法輪・サンガの成立・ヤサ親子等在家者への説法教化・カッサパ三兄弟の帰仏・マガダ国王ビンビサーラの帰依および竹林精舎の寄進、最後にサーリプッタとモッガラナーナの帰依が記されており、仏伝としては、最初期段階の成立であるとされている<sup>(11)</sup> (*Vinaya*. I pp. 1-44)。以下パーリ律受戒毘度部におけるブツダの十二支縁起観察記事を確認しておく。

### [資料1]

Tena samayena buddho bhagavā Uruvelāyaṃ viharati najjā Nerañjarāya tīre bodhirukkhamūle paṭhamābhisambuddho. atha kho bhagavā bodhirukkhamūle sattāhaṃ ekapallaṅkena nisīdi vimuttisukhapaṭisaṃvedī. atha kho bhagavā rattiyā paṭhamam yāmaṃ paṭīccasamuppādaṃ anulomapaṭīlomam manas' ākāsi: avijjāpaccayā saṃkhārā, saṃkhārapaccayā viññānaṃ, viññānapaccayā

nāmarūpaṃ, nāmarūpapaccayā saḷāyatanam, saḷāyatanapaccayā phasso, phassapaccayā vedanā, vedanāpaccayā taṇhā, taṇhāpaccayā upādānaṃ, upādānapaccayā bhavo, bhavapaccayā jāti, jātipaccayā jarāmaṇaṃ sokaparidevadukkhadomanassupāyāsā sambhavanti. evaṃ etassa kevalassa dukkhakkhandhassa samudayo hoti. avijjāya tv eva asesavirāgaṇirodhā saṃkhāraṇirodho, saṃkhāraṇirodhā viññāṇaṇirodho, viññāṇaṇirodhā nāmarūpaṇirodho, nāmarūpaṇirodhā saḷāyatanāṇirodho, saḷāyatanāṇirodhā phassaṇirodho, phassaṇirodhā vedanāṇirodho, vedanāṇirodhā taṇhāṇirodho, taṇhāṇirodhā upādānaṇirodho, upādānaṇirodhā bhavaṇirodho, bhavaṇirodhā jātiṇirodho, jātiṇirodhā jarāmaṇaṃ sokaparidevadukkhadomanassupāyāsā nirujjhanti. evaṃ etassa kevalassa dukkhakkhandhassa nirodho hotīti. (*Vinaya*. I pp. 1-2)

そのとき、ブッダ・世尊はさとったばかりで、ウルヴェーラーのネーランジャラー河のほとりにある菩提樹の根元におられた。そして、世尊は、七日間、菩提樹の根元で、一たび足を組んで、解脱の安樂を感受して座った。さて、世尊は、夜の初め頃に、縁起を順・逆に考察された。無明によって行があり、行によって識があり、識によって名色があり、名色によって六処があり、六処によって接触があり、接触によって感受があり、感受によって渴愛があり、渴愛によって取著があり、取著によって有があり、有によって生があり、生によって老と死や、愁・悲・苦・憂・悩が生じる。このように、この苦しみの集まり全体が生起するのである。しかし、無明がすべて離滅すれば、行も滅し、行が滅すれば、識が滅し、識が滅すれば、名色が滅し、名色が滅すれば、六処が滅し、六処が滅すれば接触が滅し、接触が滅すれば感受が滅し、感受が滅すれば渴愛が滅し、渴愛が滅すれば、取著が滅し、取著が滅すれば、有が滅し、有が滅すれば、生が滅し、生が滅すれば、老と死や、愁・悲・苦・憂・悩が滅する。このように、この苦しみの集まり全体が消滅するのである

と。

上記のように、ここでの十二支縁起観察（無明〈avijjā〉・行〈saṃkhāra〉・識〈viññāṇa〉・名色〈nāmarūpa〉・六処〈saḷāyatana〉・接触〈phassa〉・感受〈vedanā〉・渴愛〈taṇhā〉・取著〈upādāna〉・有〈bhava〉・生〈jāti〉・老死〈jarāmaraṇa〉）は、流転分・還滅分ともに順観察の形式となっており、<sup>(12)</sup>ブツダ成道後に行われた設定となっている。<sup>(13)</sup>このあと、夜の中頃・夜の終わり頃に繰り返し縁起観察が行われる（*Vinaya*. I p. 2）。同様の記事が *Udāna* にも存在する（*Udāna*, pp. 1-3）。これと異なる形態の十二支縁起成道記事を伝承するのが *Samyuttanikāya* XII. 4-10 である（*SN*. II pp. 5-11）。ここでは、過去の六仏とブツダが、正覚以前の菩薩時代に十二支縁起を流転分逆観察・順観察、還滅分逆観察・順観察の順番で観察した事が記されており、[資料1]とは異なる形態の伝承となっている。これと同様の観察形式を持つのが、*Samyuttanikāya* XII. 65 と *MAP* であるが、注意すべきことは、この二経は、流転分・還滅分共に無明と行を欠く十支縁起となっている点である。そして *Samyuttanikāya* XII. 65 は、*MAP* におけるヴィパッシン仏の縁起成道記事と、密接に関わる内容となっている。そのことについて、次章以降で検討していく。

## 2. 「城邑経」類について

ここでは *Samyuttanikāya* XII. 65 Nagara（*SN*. II pp. 104-107, 以下「パーリ城邑経」）と、その異本の縁起説について過去の研究を整理・確認しておく。先述したようにパーリ城邑経では、無明と行を含まない十支について、老死の原因追及からの流転分逆観察から始まり、流転分順観察、還滅分逆観察、還滅分順観察の順番に、縁起観察が記される。また、ここでの逆・順両観察には、「識を縁として名色がある・名色を縁として識がある」というように、識と名色に相互依存関係がみられる。しかしながら、パーリ城邑経に対応する漢訳・梵本が保存する縁起説は、流転分十支・還滅分十二支という

特殊な縁起説の形態を持つため、縁起説の変遷・展開を考察するうえで重視されてきた<sup>(14)</sup>。さらに、パーリ以外の「城邑経」類に記される流転分十支・還滅分十二支の縁起説は、説一切有部系の論書などに引用されることなどから、部派・学派における縁起説の形式を解明するうえでも貴重な資料となった<sup>(15)</sup>。パーリ城邑経は、ブッダが修行中であった菩薩時代のことを回想して語る設定となっており、先述した十支縁起観察記事の後に、ある人が、古人の辿った古道を発見し、それに従ったらすばらしい古城・古都があり、それを聞いた王・大臣によって復興された都城は、その後、大いに栄えたという話を示し、ブッダ自身もそれと同じように過去の正等覚者の辿った古道を発見したと比丘たちに説明する。その古道とは八正道であることが記され、その道に従うことによって「老死を知り、老死の集を知り、老死の滅を知り、老死の滅にいたる道を知った」という様に、十支について順次述べる内容となっている<sup>(16)</sup>。上記の内容から本経は、「城邑経」（あるいは「城喻経」）と呼ばれる<sup>(17)</sup>。

さて、パーリ城邑経の十支縁起観察記事は、MAP におけるヴィパッシン仏成道記事の縁起観察と同じ形態となっている。またパーリ城邑経には過去の正等覚者 (pubba sammāsambuddha) の用語があることから、本経は縁起説の展開のみならず、仏陀観の変遷を考察するうえでも MAP と併せて注視されてきた。ここでの「過去の正等覚者」の概念を発展させたのが、「大本経」類におけるヴィパッシン仏等の過去仏であることが指摘されている<sup>(18)</sup>。以上の事柄を確認したうえで、MAP におけるヴィパッシン仏成道記事を検討していく。

### 3. Mahāpadānasuttanta におけるヴィパッシン仏成道記事

MAP では、過去仏であるヴィパッシンが、菩薩時代に縁起説を観察することによって、成道することが記されている (DN. II pp. 30-35)。縁起説の内容・形式は、パーリ城邑経と同形態の十支縁起である。還滅分逆観察と順観察の間で、ヴィパッシン菩薩によって観察の道は、さとりに達したことが

記されることと、<sup>(19)</sup>縁起観察記事がすべて終了すると、それまでヴィパッシンに対して「菩薩」の呼称が用いられていたのが、「世尊・阿羅漢・正等覚者」になることから、この十支縁起観察記事を成道記事と見なすことができる。また、この記事の最後には、五取蘊について、生と滅の観察を行うヴィパッシン菩薩に<sup>(20)</sup>取著がなくなり、煩惱を離れて解脱したことが記される。

さて、MAP の十支縁起は、漢訳・梵本では異なる形態で伝承されている。パーリ以外の諸経は、散文で説明した内容を韻文で再度記す体裁となっているのだが、<sup>(21)</sup>『大本経』『毘婆尸仏経』では、散文・韻文部分において、流転分・還滅分共に無明と行を加えた十二支となっている（大正 1, pp. 7b-8b, pp. 155c-156b）。梵本では、Waldschmidt 校訂本では散文部分が流転分十支・還滅分十支であったが（ed. Waldschmidt, pp. 134-141）、吹田隆道氏が、「城邑経」類と、新たな写本を用いることによって、流転分十支・還滅分十二支に復元・訂正した。<sup>(22)</sup>韻文部分は流転分・還滅分共に十二支である。MAP およびその異訳経典が記す縁起説に関しては、流転分十支・還滅分十二支の縁起説を保存する「城邑経」類との比較・検討により詳細な研究がなされてきた。<sup>(23)</sup>「大本経」類が保存する縁起説の支分数の相違について平川彰氏は、本来パーリが伝承する流転分・還滅分十支の形式であったものが部派分裂後に梵本の所属部派である説一切有部では還滅分を十二支に、『大本経』の所属部派である法蔵部では流転分・還滅分共に十二支に改作した可能性を示唆する。<sup>(24)</sup>ここで注目したいことは、「大本経」類・「城邑経」類ともに、パーリ伝承の経典のみ、流転分・還滅分共に十支縁起を伝承している事である。MAP のヴィパッシン仏成道記事に無明と行が含まれていないことに関して注釈書は以下のように説明する。

[資料 2]

Nāmarūpe kho sati viññāṇan ti: Ettha pana saṅkhāresu sati viññāṇan ti ca avijjāya sati saṅkhārā ti ca, vattabbam bhavēyya. Tad ubhayam pi na gahitaṃ. Kasmā? Avijjā saṅkhārā hi atīto bhavo. Tehi saddhiṃ ayaṃ vipassanā na ghaṭiyati. Mahāpuriso hi

paccuppanna-vasena abhiniviṭṭho. Nanu ca avijjā saṅkhārehi aditṭhehi na sakkā Buddhena bhavitun ti? Saccam na sakkā. Iminā pana te bhava-upādāna-taṅhā-vasena eva ditṭhā ti. (*Sumaṅgala-vilāsinī* II p. 459)

「名色があれば識がある」ということについて「行があれば識がある」と「無明があれば行がある」が説示されるべきであるが、それは両方とも把握されていない。なぜか。無明と行は過去の有だからである。それらとこの観察は続けられない。偉大な人は現在によって捉えているからである。しかし、無明と行を観察せずに仏陀となることは不可能なのではないか。確かに不可能である。しかし彼はそれらを、有・取著・渴愛によってのみ観察するのである。

これは *Visuddhimagga* において確立した、無明と行を過去世、生と老死を未来、それ以外の支分を現在に配当することによって、十二支縁起を三時に分ける三世両重因果説に基づくものであるが、無明と行は、有・取著・渴愛によって観察されたと説明する。パーリ城邑経の注釈書もほぼ同文の説明を示す (*Sāratthappakāsinī* II p. 115)。つまり、パーリ伝承においても、注釈書が成立した後世の段階では、漢訳・梵本と同様に無明と行を加えた十二支縁起が想定されていたと考えられる。<sup>(25)</sup>しかし、それにもかかわらず、経典レベルでは、十支縁起として伝承されたことについては、なお検討の余地があろう。先述したように従来の研究によると、流転分・還滅分共に十支縁起観察による縁起成道記事は、MAP とパーリ城邑経の二経となる。他のパーリ伝承の縁起成道記事は全て流転分・還滅分共に十二支縁起観察となっている。<sup>(26)</sup>この点について和辻哲郎氏は興味深い指摘をしている。和辻氏は「大本経」類が、[資料1]を記す律蔵受戒犍度部の仏伝等よりも後に成立した文献であろうことを述べたうえで、パーリが十支、漢訳が十二支の縁起説を記していることについて「もしブツダの成道を十二因縁にありとする伝承が非常に古いものであるならば、この相違は理解し難いものになるであろう。それに反して、仏伝の物語が文学的伝承としてその独特の発達段階を経てい



る間に、それと並んで教理的伝承がまたその独特の発達段階をたどり、そのある段階とある段階とが結合して大本経となったと解すれば、右の相違は容易に理解される。漢訳は教理の伝承のより新しい段階を利用しているに過ぎぬ」と述べる<sup>(27)</sup>。つまり十支縁起による成道のほうが古い教義であり、それが、律蔵受戒犍度部の仏伝よりも後の成立であろう MAP に組み込まれたと判断している<sup>(28)</sup>。初期仏教の縁起説は、十支・十二支以外に五支縁起、九支縁起等が確認されている。これらは基本的に支分の少ないものから出来上がり、最終的に十二支に至ったこと、さらに、縁起説観察方法についても、MAP・パーリ城邑経が伝承する十支縁起逆観察の形式が、[資料1]の十二支縁起順観察の形式よりも先に成立したものであることが指摘されている<sup>(29)</sup>。以上のことから、十支縁起成道記事は、十二支縁起成道記事よりも先に成立したと考えられる。そして、パーリ伝承の仏伝における縁起成道記事は、受戒犍度部がそうであるように、通常十二支縁起が用いられるようになったのであれば、その前段階から存在した、パーリ城邑経が伝承する流転分・還滅分共に十支縁起逆観・順観形式の成道記事は、ブツダの成道記事には組み込めなくなる。その一方で、ブツダの十支縁起観察記事が、仏伝ではなく、過去仏の伝記である「ヴィパッシン仏伝」の成道記事に組み込まれ、十二支に変更されることなく伝承された可能性が生じる。となると、経典全体としての編纂時期が、阿含・ニカーヤの中ではそれほど古層に属さない MAP に、十二支縁起成道記事に先行する形態である、パーリ城邑経が伝承する十支縁起成道記事が保存されていることになる。またパーリ城邑経・MAP と同様の観察形式にもかかわらず、*Samyuttanikāya* XIII. 4-10 の縁起観察記事が十二支となっているのは、ブツダの縁起成道が十二支縁起に固定化した後に、無明と行が付加されたためと考えられる。その内容は、『大本経』『毘婆尸仏経』の縁起成道記事と、ほぼ一致している。

## ま と め

MAP が記す過去仏の成道記事について、流転分・還滅分ともに十支縁起の観察となっていることに着目した。そして「城邑経」類にまつわる過去の研究と、パーリ注釈書等を併せて調査・検討した結果、MAP が保存する流転分・還滅分共に十支縁起観察による成道記事は、パーリ律受戒犍度部の仏伝等に含まれる十二支縁起観察による成道記事よりも前段階に成立したものである可能性を示した。つまりパーリ上座部では、仏伝に含まれる十二支縁起成道記事に先行する、古形のブッダ成道記事が、「ヴィパッシン仏伝」に過去仏成道記事として組み込まれ、変更されることなく伝承されたことになる。以上の事柄は、説一切有部系「城邑経」の伝承と、仏伝との関係を併せて考察する必要がある。というのも、馬鳴 (Aśvaghoṣa) 作の仏伝である *Buddhacarita* が、有部系の城邑経が保存する流転分十支・還滅分十二支の縁起観察を、ブッダ成道記事として用いている可能性が指摘されているからである。<sup>(30)</sup> 今後は、これらのことも含めて、仏伝・過去仏伝と縁起説の融合等について考察していく予定である。

(パーリ語のテキストはすべて PTS 版を使用)

### 〈略号〉

DN. = *Dīghanikāya* (PTS)

SN. = *Saṃyuttanikāya* (PTS)

Vinaya. = *Vinayapitaka* (PTS)

大正 = 『大正新修大蔵経』

### 註

- (1) 阿含・ニカーヤ、律蔵に含まれる仏伝については、外蘭幸一『ラリタヴィスタラの研究 (上)』(大東出版社, 1995) pp. 43-48 に列挙されている。増谷文雄氏は、意図的に編纂された最初期の仏伝文献として、パーリ律大品 *Mahākhanda* に含まれる仏伝, *Ariyapariyesanasutta* (MN. 26), *Mahāparinib-*

*bānasuttanta* (DN. 16) を詳細に分析した。増谷文雄『仏陀の伝記—資料の研究— (増谷文雄著作集 5)』(角川書店, 1981) pp. 106-339。また, 現存する仏伝の発展過程に関しては, 平等通照『印度佛教文学の研究(1)』(印度学研究所, 1930) pp. 139-173 参照。

- (2) この事に関して平川彰氏は, 「経典作者は仏陀の伝記を作るのが目的で経典を語っているのではなく, 別の真理を示さんとしたものが, たまたま仏伝の形をとったにすぎないのである。すなわち仏伝が, 何らかの教理的価値をもっており, 弟子たちの修行に有意義である場合のみ, 聖典として語りつがれる資格を持ったのである」と述べる。平川彰『律蔵の研究II <著作集10>』(春秋社, 2000) p. 101。この視点を持てば, ブッダの生涯を断片的に記す文献の存在はなんら不思議ではない。

- (3) *Mahāpadānasuttanta* (DN. 14, DN. II pp. 1-54.)

対応する漢訳は仏陀耶舎・竺仏念訳『長阿含経』巻第1「大本経」(大正1, No. 1, pp. 1b-10c, 本稿では『大本経』と表記する。)

中央アジアで発見された本経に対応する梵本の断簡も存在し, Waldschmidtにより校訂出版された。E. Waldschmidt, *Das Mahāvādānasūtra* Teil. 1, 2. (AKADEMIE-VERLAG Berlin, 1953, 1956). 梵本の所属部派は説一切有部系である可能性が高い。草間法照「*Mahāvādānasūtra* に関する一考察」『印度学仏教学研究』22-1 (1973) pp. 383-388 参照。また近年, 吹田隆道氏の校訂により以下のテキストが出版された。Takamichi Fukita, *The Mahāvādānasūtra A new edition based on manuscripts discovered in northern turkestan* (Vandenhoeck & Ruprecht, 2003) 本稿では上記パーリ本・『大本経』・梵本を総称する際, 「大本経」類と表記する。

- (4) 鹽入良道「中国仏教における仏名経の性格とその源流」『東洋文化研究所紀要』42 (1966) pp. 221-320, 梶山雄一「仏陀観の発展」『佛教大学総合研究所紀要』3 (1996) pp. 5-46 他参照。

- (5) 『大本経』には以下に挙げる四本の異訳が存在する。

- ・法天訳『仏説七仏経』(大正1, No. 2, pp. 150a-154a)
- ・法天訳『毘婆尸仏経』(大正1, No. 3, pp. 154b-159a)
- ・失訳『七仏父母姓字経』(大正1, No. 4, pp. 159a-160a)
- ・僧伽提婆訳『増一阿含経』不善品第4経, (大正2, No. 125, pp. 790a-791b)

『七仏経』は「七仏の事蹟」部分と毘婆尸菩薩誕生記事を保存し, 『毘婆尸仏経』は毘婆尸太子の四門出遊記事から毘婆尸仏による波羅提木叉の誦出・制定記事までを保存する。『七仏父母姓字経』『増一阿含経』は, 「七仏の事蹟」部分のみ保存する。『七仏経』と『毘婆尸仏経』は二つ合わせると「大本経」類

- に相当する内容となるため、「大本経」類の成立過程を考察するうえで重視されてきた。過去の研究については拙稿「希有未曾有法経における菩薩誕生記事の問題点」『龍谷大学大学院文学研究科紀要』27 (2005-B) p. 15 参照。
- (6) 誕生から般涅槃に至るブツダの全生涯について記す文献の出現について Étienne Lamotte 氏は、紀元 2 世紀まで待つ必要があるとして、具体的な仏伝文献として、馬鳴 (Aśvaghoṣa) 作の *Buddhacarita* 等を挙げる。Étienne Lamotte, *History of Indian Buddhism*, trans. Sara Webb-Boin (Institut Orientaliste Louvain-La-Neuve, 1988) p. 655 参照。「ヴィパッシン仏伝」について平等通照氏は「断片的な仏伝しかない阿含聖典の中で特異な存在をなしている」と指摘する。平等通照『佛陀の死』(印度学研究所, 1961)p. 32 参照。平川彰氏は、「大本経」類にはブツダの一生を八つの事蹟で示す「八相成道」の思想に発展する要素があることを指摘する。平川彰『仏教入門』(春秋社, 1992) pp. 133-137 参照。また、パーリ経典では後期の成立である *Buddhavaṃsa* には、簡単ではあるが、ヴィパッシン仏の涅槃について記されている (*Buddhavaṃsa*, p. 79)。「ヴィパッシン仏伝」における菩薩誕生記事の成立過程と問題点に関しては、拙稿 [2005-B] pp. 1-16, 初転法輪記事に関しては拙稿「「大本経」類における過去仏の初転法輪記事」『龍谷大学大学院文学研究科紀要』28 (2006) pp. 1-15, 波羅提木叉制定記事の成立に関しては、拙稿「Mahāpadānasuttanta とパーリ律経分別の関係」『パーリ学仏教文化学』18 (2005-A) pp. 77-84 参照。
- (7) 過去の研究に関しては、拙稿 [2006] p. 11 参照。
- (8) 「ヴィパッシン仏伝」が保存する菩薩誕生記事については、もともと過去仏の誕生記事として編纂された可能性を既に示した。拙稿 [2005-B] 参照。
- (9) 縁起成道記事については、平野真完「縁起成道説資料」『印度学仏教学研究』13-1 (1965) pp. 187-191 で詳細に整理・検討がなされている。他に上野順瑛「十二縁起と成道との結合の意義」『印度学仏教学研究』12-1 (1964) pp. 154-157, 村上真完「諸法考—dhamma の原意の探求と再構築—(1) 諸法と縁起」『佛教研究』34 (2006) pp. 63-132 参照。縁起成道記事を用いない、ブツダ成道に関する文献については、中村元『ゴータマ・ブツダ I <選集決定版 11>』(春秋社, 1992) pp. 359-421, 森章司・本澤綱夫・岩井昌悟編「仏伝諸経典および仏伝関係諸資料のエピソード別出典要覧」『原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究【3】』(中央学術研究所, 2000) pp. 85-98 他参照。
- (10) 以下の箇所に仏伝が含まれる。パーリ律「小品」Mahākhandhaka (*Vinaya*. I pp. 1-44), 『四分律』「受戒撻度」姚秦仏陀耶舎・竺仏念等訳 (大正22, No. 1428, pp. 779a-799b), 『五分律』「受戒法」宋罽賓三蔵仏陀什共竺道生等訳 (大正22, No. 1421, pp. 101a-110c)。これは、出家受戒作法について記す箇

所である。所謂犍度部の呼称は律によって異なる。本稿では、この箇所を「受戒犍度部」と統一して呼ぶことにする。受戒犍度部の仏伝については、平川彰 [2000] pp. 97-178 で詳細に検討されている。また、『根本説一切有部律』『破僧事』に保存される仏伝については、佐々木閑『『根本説一切有部律』にみられる仏伝の研究』『西南アジア研究』24 pp. 16-34 (1985) 参照。

(11) 『四分律』『五分律』は成道以前についても記す (大正22, pp. 779a-781a, pp. 101a-102c)。この箇所は後に付加されたものと思われる。増谷文雄 [1981] pp. 131-139 参照。

(12) 十二支縁起観察の形式は以下の四つがある。

A①「無明を縁として行がある。… (省略) …生の縁より老死, 愁悲苦憂悩が生じる」②「生を縁として老死がある。… (省略) …無明の縁より行がある」

B①「無明の滅より行の滅がある。… (省略) …生の滅より老死, 愁悲苦憂悩が滅する」②「生の滅より老死の滅がある。… (省略) …無明の滅より行の滅がある」

上記の縁起観察方法の呼び方は学者によって異なるが、本稿では、村上真完氏と同じく『阿毘達磨大毘婆沙論』に従って、Aを流転分、Bを還滅分、①を順観察、②を逆観察とする。村上真完「サンスクリット本城邑経」『佛教研究』3 (1973) p. 21-22 参照。また、成道記事で用いられる縁起観察は、多くの場合が [資料1] と異なり、老死の原因追求からの逆観察で始まる内容となっている。平野真完 [1965] p. 187参照。

(13) この事について注釈書は以下のように説明する。

paṭhamābhisambuddho ti paṭhamam abhisambuddho. abhisambuddho hutvā sabbapaṭhamam yevā ti attho. (*Samantapāsādikā* V pp. 952-953) <paṭhamābhisambuddho とは最初に悟ったということである。悟った [人] となって、まさに最初という意味である。>

『五分律』の内容は以下の通り。

始得佛道坐林樹下。初夜逆順觀十二支縁起 (大正22, p. 102c)

『四分律』は十二支縁起については記さず、ブッダが菩薩時代に四禪・三明を得て成道したことが記される (大正22, p. 781a-b)。

(14) パーリ城邑経に相当する漢訳は『雜阿含経』第287経「城邑経」(求那跋陀羅訳, 大正2, No. 99, pp. 80b-81a) また以下の異訳が存在する。

- ・支謙訳『貝多樹下思惟十二因縁経』(大正16, No. 713, pp. 826 b-827b)
- ・玄奘訳『縁起聖道経』(大正16, No. 714, pp. 827 b-828c),
- ・法賢訳『仏説旧城喻経』(大正16, No. 715, pp. 829 a-380b)
- ・僧伽提婆訳『増一阿含経』卷31 (38-4) (大正2, No. 125, p. 718a-c)

梵本は以下の四本が校訂・出版されている。

S. Lèvi, “Textes sanscrits de Touen-Houang,” *JA* II (1910) pp. 433-456.

E. H. Johnston, “The Gopālpur Bricks,” *JRAS* (1938) pp. 547-553.

C. Tripāthi, *Fünfundzwanzig Sūtras des Nidānasamyukta (Sanskrittexte aus den Turfanfunden herausgegeben im Auftrage der Akademie von Ernst Waldschmidt, VIII)* (Akademie-Verlag Berlin, 1962)→村上真完 [1973] により訂正・再校訂。

G. Bongard-Levin, D. Boucher, T. Fukita, K. Wille, “The Nagaropamasūtra : An Apotropaic Text from the Samyuktāgama,” *SWTF*, Beiheft6 (1996) pp. 7-131.

本稿では、パーリ城邑経と上記の漢訳・梵本を総称する際、「城邑経」類と表記する。パーリ城邑経（流転分・還滅分共に十支）と『増一阿含経』（流転分・還滅分共に十二支）以外の諸経は流転分十支・還滅分十二支の縁起説を保存する。ただし『増一阿含経』の支分数に関しては村上真完 [1973] p. 24, S. Lèvi [1910] の支分数に関しては平野真完 [1965] p. 189 参照。

(15) 『雑阿含経』第287経「城邑経」が、流転分十支・還滅分十二支であることに最初に注目したのは武内義範「縁起説に於ける相依性の問題点」『五十周年記念論集 京都大学文学部』（1956）pp. 153-181である。武内氏は十二支縁起説成立段階過程において、流転分十支・還滅分十二支の形態を保持する『雑阿含経』第287経「城邑経」は、パーリ城邑経の流転分・還滅分十支と、流転分・還滅分十二支縁起の形態の途上にあるものと位置付け、無明と行は、識の根拠として先に還滅分において形成したと述べる。その後、村上（平野）真完氏は、梵文資料を整理し、パーリ・漢訳と併せて詳細な比較検討を行った。平野真完「因縁相應の梵文資料—印度古塔出土の煉瓦銘文の内容比定—」『印度学仏教学研究』12-1 (1964) pp. 158-161, 村上真完 [1973] pp. 20-47 参照。他に梶山雄一「輪廻と超越—『城邑経』の縁起説とその解釈—」『哲学研究』550 (1984) pp. 324-359 など。また、識と名色の相互依存関係については、村上真完 [2006] pp. 111-117 参照。

(16) 村上真完 [1973] p. 24 では、『阿毘達磨大毘婆沙論』等の説一切有部系統に属する論書において、「城邑経」類が保存する流転分十支・還滅分十二支に基づく記述のあることを指摘している。さらに榎本文雄氏は瑜伽行唯識学派の論書に引用される「城邑経」類を指摘・分析した。榎本文雄「『撰大乘論』無性釈に引用される若干の経文をめぐって—「城邑経」の展開を中心に—」『仏教史学研究』24-2 (1982) pp. 44-57 参照。中宗根充修氏は「城邑経」類を、所屬部派によって整理・区分し、「城邑経」類を引用する文献等を併せて考察す

- ることにより、流転分十支・還滅分十二支の縁起説は説一切有部等が伝承する一つの形式であるとし、武内義範 [1956] 等の学説については再検討すべき余地のあることを指摘する。中宗根充修「説一切有部所伝の「城邑経」とその展開」『仏教史学研究』47-1 pp. 1-27 参照。
- (17) 梶山雄一氏は最後の箇所について「この後文は縁起説と八正道と四諦とを統一する意図のもとに書かれていることも明らかである」と述べる。梶山雄一 [1984] p. 330 参照。また、この箇所では先に挙げた十支について述べた後に行 (saṅkhāra) についても同様の文が記されている。
- (18) 吹田隆道「大本経に見る仏陀の共通化と法レベル化」『渡邊文麿博士追悼記念論集・原始仏教と大乘仏教 (上)』(永田文昌堂, 1993) pp. 271-284, 梶山雄一 [1996] 参照。また、パーリでは「過去の正等覚者」となっているが、漢訳・梵本の異本によっては、「古仙人」と記すものもある。平野真完「過去仏について」『印度学仏教学研究』9-2 (1961) pp. 128-129 参照。
- (19) Adhigato kho myāyaṃ vipassanā-maggo bodhāya, … (DN. II pp. 34-35) <この観察の道は私によってさとりに達した…>  
『大本経』では還滅分の観察が終わったあとで以下のように記す。  
爾時菩薩逆順觀十二因緣。如實知如實見已。即於座上成阿耨多羅三藐三菩提。  
(大正 1, p. 7c) 『毘婆尸仏経』は還滅分観察終了後、以下のように記す。  
時毘婆尸菩薩復觀色受想行識。生滅不住。如幻如化無有眞實。智觀現前。業習煩惱一切不生。得大解脫。成正等覺。(大正 2, p. 156b)
- (20) Tassa pañcas' upādāna-kkhandesu udaya-vyayānupassino viharato na cirass' eva anupādāya āsavehi cittaṃ vimucci. (DN. II p. 35) <五取蘊について生と滅の観察を行って住す彼に、まもなく取著がなくなり、様々な煩惱から心は解脱した> 『大本経』では五取蘊については記されない。
- (21) 平野真完「阿含ニカーヤの偈頌について」『印度学仏教学研究』10-1 (1962) pp. 286-289 参照。
- (22) 吹田隆道「梵文「大本経」縁起説の復元について」『仏教史学研究』24-2 (1982) pp. 26-43 参照。吹田氏は、韻文部分においても、以前は流転分十支・還滅分十二支の縁起説が伝承されていた可能性を指摘する。
- (23) 村上真完 [1973] 吹田隆道 [1982] 中宗根充修 [2004] 等参照。
- (24) 平川彰『法と縁起【平川彰著作集第一巻】』(春秋社, 1988) pp. 430-431 参照。この説に対して中宗根充修氏は、平川氏が同書の別の箇所で十二縁起は部派分裂以前に成立していた旨の説を唱えていることから (p. 294, p. 429), 上記の平川説は論理的に矛盾することを指摘している。中宗根充修 [2004] pp. 7-8 参照。
- (25) ここで引用した注釈書は、Visuddhimagga 同様、5 世紀頃のブッダゴーサ

- によるものであると考えられている。森祖道『パーリ仏教注釈文献の研究』山喜房仏書林 (1984) pp. 469-529 参照。縁起関連経典について北伝阿含とパーリ注釈書の対応関係を調査・分析した馬場紀寿氏は、[資料2] について「経典のみ比較した場合はそれぞれ異なったタイプの縁起説を説いているように見えるのだが、注釈書レベルも視野に入れれば、どの系統も無明と諸行を含んでいる」と述べる。また、『大毘婆沙論』で「城邑経」が引用されたあとに記される十支縁起の説明が、「パーリ城邑経」の注釈と同様の内容であることも指摘する。馬場紀寿「北伝阿含の注釈書要素—縁起関連経典—」『佛教研究』31 (2003) pp. 197-198 参照。パーリ上座部が伝承する三世両重因果説については馬場紀寿「縁起支解釈の展開—上座部大寺派の三世両重因果説—」『インド哲学仏教学研究』10 (2003) pp. 17-31, アビダルマが記す三世両重因果説については、梶山雄一 [1984] 他参照。
- (26) 但し平野真完 [1965] は、吹田隆道 [1982] 以前の調査であったため Waldschmidt 校訂本 *Mahāvadānasūtra* も流転分・還滅分共に十支縁起観察の縁起成道資料としている。
- (27) 和辻哲郎『原始仏教の実践哲学』(岩波書店, 1927) p. 80 参照。
- (28) 中村元氏は、「原始仏教の古い層では、はるかに簡単な縁起説が説かれている。したがって律蔵などに説かれている十二支縁起説は、原始仏教のうちでもかなり遅い時期になって、釈尊のさとりを説く場所に挿入されたにちがいない」とし、パーリ城邑経の十支縁起説を十二支縁起の成立する以前の段階であると述べる。中村元 [1992] p. 400。また、MAP の成立年代については、古い要素は含まれているものの、経典全体としては、ニカーヤの中で、それほど早い時期の成立ではないことが指摘されている。平等通照 [1930] p. 142, [1961] p. 36, 梶山雄一 [1996] p. 9 参照。
- (29) 縁起説における支分数の展開については、中村元『原始仏教の思想 (下)』(春秋社, 1971) pp. 41-175 参照。また、縁起観察順観・逆観の新古について三枝充恵氏は、老死に始まる逆観察においては、無明・行などの支分を欠く五支・十支縁起等が多数存在することに着目し、これを十二支縁起観察に至る過程と見なし、逆観察による縁起観察が先に成立し、その反省および理論化によって [資料1] 型の十二支縁起順観察が成立したと指摘する。三枝充恵『初期仏教の思想』(東洋哲学研究所, 1978) p. 584 参照。森章司『原始仏教から阿毘達磨への仏教教理の研究』(東京堂出版, 1995) pp. 469-612 では縁起説を形態別に整理し、その展開について詳細な調査・検討がなされている。
- (30) 梶山雄一「Aśvaghōṣa の伝える縁起説」『仏教と文化—中川善教先生頌徳記念論集—』(1983) pp. 201-219, 本庄良文「馬鳴の学派に関する先行学説の吟味」『渡邊文麿博士追悼記念論集・原始仏教と大乘仏教 (下)』(永田文昌堂, 1993) pp. 27-43 参照。



*Mahāpadānasuttanta* における過去仏の成道記事

〈付記〉 本稿で論じた内容については、平成18年度龍谷仏教学会学術研究発表会（2007年1月25日）において「*Mahāpadānasuttanta* における過去仏成道記事の問題点」と題して口頭発表した。